

木原 毅(三重)

ジャストベース専門施工・販売店／株式会社 東海ベース

〒454-0983 名古屋市中川区東春田1丁目29番

TEL:052-485-6205 FAX:052-485-6206



地震の時にも耐えられる製品

ジャストベースは1998年に(一財)日本建築センターの評定を受け、以来保有耐力接合を満足した露出型弾性固定柱脚工法として皆様に御採用頂いております。

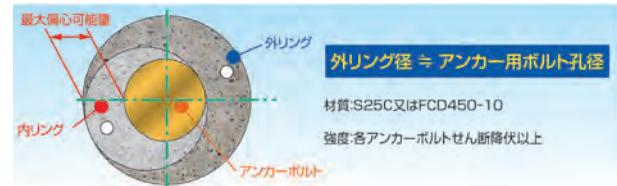


最初の評定(1998年)から10年を経験し、フルモデルチェンジを行いました。その2年後には円形鋼管を追加し、2019年にはそれまでの角型鋼管を

改良したJE II型を発売開始いたしました。

ジャストベースの特徴として、ジャストリングという物があります。この商品は名古屋工業大学の先生たちとコトブキ技研工業(株)が共同開発を行い、三日月型2枚リングでアンカーボルトとベースプレートのクリアランスを埋めるという、当時では革新的なデザインを発明いたしました。(デザイン特許を取得)

鋼管柱建込み時にジャストリングを装着することにより、柱を自立させることが可能



■ジャストリング詳細

なため、建て方途中での転倒防止と横方向のズレ防止などの安全仮設対策を省略でき、工期短縮と仮設工事のコストダウンに繋がることができる商品となります。

ジャストベースは一般的な鋼管材質(□150～550)に対応しており、お客様のご要望に広く応えられるものと思っております。ご興味をお持ちになられましたら、お気軽にお問合せご相談ください。

ジャストベースを今後ともよろしくお願いいたします。

建築確認検査、住宅性能評価、
住宅かし保険、構造計算適合性判定、
省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協力会通信 61	
株式会社東海ベース	表紙裏
木原 肇	
地域会だより	1
連載【隔月 全6回】	
morinosに見る木造建築の設計手法	
第6回 -地域固有の建築文化をつくる-	2
辻 充孝	
連載:コンペ・プロポーザルのありかた ③	
これからの建築家資格制度を考える	
～鯉坂先生によるセミナーを開催～	4
杉本 憲治	
静岡発	
カトリック清水教会聖堂の保存・活用への展望	5
土屋 和男	
愛知発：事業委員会報告 一寸格子ワークショップ	
猪高小学校建築教室 ～ひなん時の「くつろぎハウス」をつくろう～	6
黒野 有一郎・笹野 直之・金山 美登利	
中川 竜夫・山田 浩史・細井 昭男・北村 直也	
愛知発：名古屋市立大学授業「建築家の仕事」	
講義 建築家の仕事を終えて	8
矢田 義典・尾関 利勝	
愛知発：講演会	
過去から内部へのボリュームスタディ	
— 小堀哲夫 講演会レポート —	10
白川 在	
自作自演 254	
サイクリングライフ	11
畠田 昌志	
さまざまなとておき	11
中村 久	
保存情報 第254回	
登録有形文化財：大奢家住宅「花咲乃庄」	12
山田 正博	
編集後記	12
川本 直義・谷川 ヒロシ	
三重発	
三重建築学生合同課題発表会2022	13
出口 基樹	

表紙 街で見かけた風景 12

通り沿いのお店の灯りが相合傘の二人を誘っています。ふと、上を見ると空調機の室外機が並んでいるのが目に入ります。地震になれば危険な場所も楽しいそぞろ歩きの街路なのです。鈴木了二氏が住宅においての「新鮮さ」の重要性を説いています。なぜならそれはほかのどんな種類の建築よりも「住宅」が、生活を介して日常性に接続しているからである。そして日常性こそが、生活こそが「新鮮さ」であるべきだ。

「建築家の住宅論」 鈴木 了二 2001年 鹿島出版会

地域会だより / 今後の予定

■JIA東海支部

・3/24 第9回支部役員会

■JIA静岡地域会

・3/14 静岡地域会役員会の開催(WEB併用)

・3/14 第2回JIA塾

(協力会員による2023年向け 最新技術情報発表会)(WEB併用)

■JIA愛知地域会

・3/3 企業PR会(WEB併用)

・3/3 第9回役員会(WEB併用)

・3/31 企業PR会(WEB併用)

・3/31 第10回役員会(WEB併用)

■JIA岐阜地域会

・3/16 第11回役員会 18:30～20:30

■JIA三重地域会

・3/10 第8回役員会・第7回例会、

会員研修会④「暮らしから建築へ」講師：富田崇(対面・オンライン併用)

JIA に入会して

正会員



北村 直也 (JIA岐阜)
北村直也建築設計事務所

JIAに入会させていただくにあたって期待していることは、建築の意匠や技術的なことはもちろん、日々技術の進展、コロナや戦争などの海外情勢による影響、話しづらいクライアント・工事会社とのトラブルや保険や経営についてなどなど、先輩方の色々な助言や情報共有ができるところです。その他、建物見学や講演会なども楽しみにしています。締めくくりに、この度JIA入会にあたり推薦していただいた皆様に感謝の言葉を申し上げたいと思います。



吉元 学 (JIA愛知)
ワークキューブ／愛知淑徳大学

地域固有の建築文化をつくる

1. はじめに

耐震や温熱性能だけを高めても後世に残る建築にはなりえない。必要なのは性能に加えて、デザインや機能性、素材、周辺環境なども含めた総合的な見方である。これまで地域材の利用や実測を通して様々な視点でmorinosを紹介してきた。最終回となる今回は、総合的な視点で考えるきっかけを伝えたい。

2. 建物を総合的に評価する

CASBEE（建築環境総合性能評価システム）をご存じだろうか。名前の通り、建築の環境性能（工コ度）を総合的に評価するツールである。

非常にユニークな評価システムで、単純に環境性能を上げれば良い評価になるわけではなく、環境負荷の低減も考慮した環境性能効率BEEで評価する。つまり分子の環境性能（Quality）を向上しつつ、分母の環境負荷（Loading）を減らすのである。

QとLはそれぞれ100点満点で考え、50点が普通の建物である。何も工夫していない一般的な建物のBEEはQ50点/L50点で1.0となる。

一方、断熱強化や高効率設備の導入などで環境性能を高めても、エネルギー消費が多いと環境負荷も多くなり、Q100点/L100点でBEEは1.0と一般的な建物と同じになる。目指すべきは環境性能を高めながら環境負荷を減らした建物である。

CASBEEの評価項目は多岐にわたり、環境性能にはQ1：室内環境（23項目）、Q2：サービス性能（30項目）、Q3：敷地内の室外環境（4項目）の計57項目ある。一方、環境負荷低減性LR（Load Reduction）も同様にLR1：エネルギー（8項目）、LR2：資源・マテリアル（13項目）、LR3：敷地外環境（15項目）の36項目で構成され、建物全体では93の評価項目がある。

すべてを評価するのは大変だが、計画初期からこれらの評価項目を意識すること



で、幅広い視点で建物を考えることができるようになる。

ただし、CASBEEもすべてを評価できるわけではなく3つの点に注意したい。

1点目は、建物の美しさなどの審美性は評価しないこと。2点目は費用対効果や市場価値、収益性などの経済性は評価しないこと。3点目は93項目の重要性を考慮して

点数に重みづけがされていることである。

morinosは、Q86点/L17点でBEE5.1と非常に良い評価結果である。

同時にライフサイクルCO₂(以下LCCO₂)やSDGsの取り組み具合も評価できる。

上図中央下のLCCO₂評価の①参照値が一般的な建築物のLCCO₂(1年・1m²あたり)である。最も大きいのは運用時のCO₂で全

体の6割以上を占める。建設時や解体時のCO₂削減も大切であるが、まずは運用時を減らさないことに、全体が減っていくかなことがわかる。②がmorinosの計算結果である。全体で概ね半減、運用時のみでは7割近く削減している。

下2段は発電やカーボンのオフセットなどの取り組みがあった場合の評価である。またSDGsチェックリストにより、取り組み具合も確認できる。morinosでは、全体的に高評価であるがGOAL5のジェンダーとGOAL9のイノベーションが少し低めである。これはLGBTに対する具体的な設計の不足や、最新技術の建材や設備のIoT化、BEMSの未導入等が影響している。

3. 地域固有の素材を活かす

「十二単の左官壁」

ここでCASBEEでも対象範囲外の十二単の左官壁を紹介する。12層塗り重ねた壁で、下地となるのは学内演習林で採取した粘土に藁スサを混ぜた土壁である。そこに赤土や亜炭、黒泥など県内の様々な産地の土を少しずらしながら塗り重ねている。一番表面は、演習林のヒノキ樹皮を細かく碎いて海藻糊と混ぜ合わせたものである。

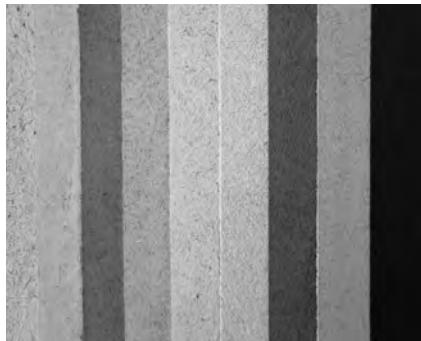
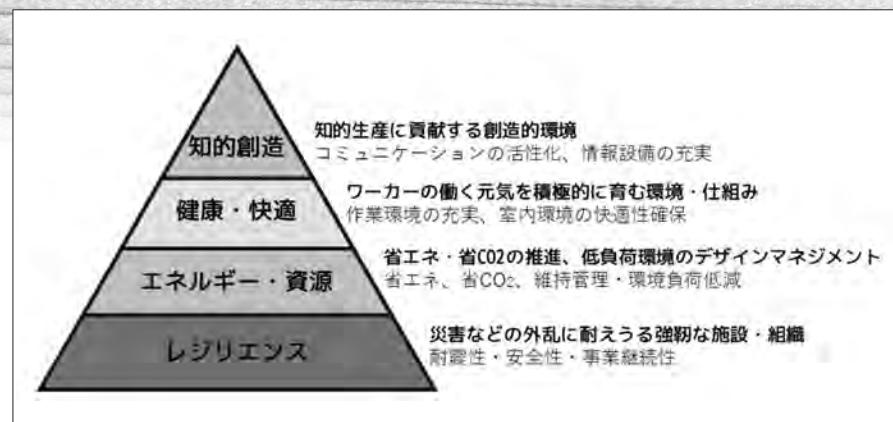


図 岐阜県内の土と樹皮を用いた十二単の左官壁

それぞれの色合いは自然で美しく、傷がついたとしても下の層が地層のように出てくるため、傷がそのまま建物の歴史になっていく狙いである。

評価ツールで取り上げられなくてもその土地のポテンシャル(素材や人材、気候特性など)を活かすような取り組みもぜひ行っていただきたい。それが地域固有の建築物につながるからである。



4. スマート・ウェルネスオフィス

カーボンニュートラルに向けたロードマップが公表され、2030年には新築建築物はZEB(ゼロエネルギー・ビルディング)を目指すことになった。運用エネルギーをゼロにすることが、CO₂削減に加えて、長期にわたってコストも抑えることにつながるのは明らかである。ただZEB以上にもっと大切なことがあることも忘れてはいけない。

連載の最後にスマート・ウェルネスオフィスという考え方を示したい。これは働き手が健康で元気で幸せに働けるオフィスモデルの概念で4つの階層で示される。ベースとなるのは最下段のレジリエンスで、耐震・耐風性能に加え事業継続を可能とする建物と組織である。

2段目には、環境負荷を低減する建物性能と運用である。ZEBの取り組みはここにあたる。

3段目に、温熱環境や空気質、音、光環境といった建物利用者やスタッフが健康で快適に建物を利用できる内容である。そして最上段に建物本来の目的である知的生産性の向上(作業効率向上、意欲向上、人材確保の優位性など)を支援するハードとソフトがあるべきである。

地域や状況にもよるが、運用時のエネルギーコスト(光熱費)を1とすると、家賃が10、人件費が100くらいの比率があるとも言われ、最もコストがかかるのが人材である。例えば30坪のオフィスに8人が働いていたとして、月々の電気代が4万円とすると、家賃が40万円、人件費は400万円(50万×8人)。ありえそうな金額である。

働きやすい環境で、仕事がはかどり、効率が10%アップしたとすると光熱費の10倍(40万円)の価値が生まれる。同時に、この施設で働きたいという有能な働き手が得られたり、つなぎ留める手助けにもなる。さらに、不動産市場におけるESG投資の対象としても効果的である。

morinosを目指したのは、省エネや構造といった性能だけを追い求めるのではなく、総合的に環境をとらえ、人の創造性を豊かにする建築である。

5. おわりに

～地域固有の建築文化をつくる～

6回の連載を通して、morinosの設計・実測のノウハウを紹介してきた。

確かな建物性能の上に、木や土に代表される地域特有の素材を用い、高い技術を持つ職人・特色ある人材が集まることで、その地域でしか実現できない建築になると考えられる。総合的なバランスの取れた建築が連なることで、町並みを形成し、地域固有の建築文化に発展していくことを期待している。

morinosのより詳しい内容はmorinos建築秘話を参照
<https://www.forest.ac.jp/facilities/morinos/>

morinosが、「第1回 SDGs建築賞 住宅・建築SDGs推進センター理事長賞」、「第17回 木の建築賞 ムクファースト 崇秀記念賞」を受賞。

岐阜県立森林文化アカデミー

教授 辻 充孝



これからの建築家資格制度を考える

コンペ・プロポーザルと登録建築家～鯵坂先生によるセミナーを開催～

●日時:2022年12月20日(火)/ZOOMウェビナー

1. セミナーの意図と背景

職能・資格制度委員会では、建築家資格制度の意義、知名度向上、資格の効用などを議論し、会員へのセミナーや座談会を企画してきました。

今回、登録建築家が参加要件や加点要素となるコンペやプロポーザルを通して、想いや考え方をJIA会員の方へ、お話ししていただける機会を設けたいと考えました。



鯵坂 徹 先生



恒川 和久 先生

2. セミナーの概要

<セミナー第1部>

鹿児島大学の鯵坂徹先生より、多くの建築家がコンペ・プロポーザルに参加しやすくなるため、実績条件または登録建築家であることを参加条件にした実例について講義を行った。

阿久根市民交流センター、延岡市内藤記念館、垂水市新庁舎、伊佐市新庁舎など公共施設での取り組みや鹿児島県でのプロポーザルの状況を説明した。

多数の応募により、自治体にもメリットがあるオープンなプロポーザルの実現は、地域の活性化にもつながることが言える。

<セミナー第2部>

名古屋大学の恒川先生との対談を行う。愛知県内でも参加要件のハードルを下げた蒲郡市でのプロポーザル開催など活動を紹介した。

阿久根市民交流センター（仮称）等公募型設計プロポーザル

The Japan Institute of Architects
公募社団法人 日本建築家協会

JIAニュース

「13.10.02 施行規則改修に伴う新エントリー書類の導入のためのガイドライン【国土交通省】」
「13.09.24 建てよしの寺町御宿「前高立柱柱頭彫刻と神宮外苑の遷坐式文書の中で考える」
が掲載されたJIAマガジン295号はこちら!」
「13.09.11 JIA video letterを公開しました」
「13.09.06 民主党及び工事監督者の複数申請者等への記載の徹底について【国土交通省】」
「13.08.27 那立指定古跡交流センター（仮称）等設計競争に係る公募型プロポーザル申込
規制の改正に委嘱建築監理費用が算定されました」

3. 今後の課題

国土交通省の発注では、5割以上がプロポーザルとなっているが、自治体によっては、審査側で要綱がつくれないことが課題である。特に小規模な公共施設では、入札による設計者選定となっている場合が多い。JIAとして、プロポーザルに向けたサポートを行い、建築設計者の積極的な取り組みを支援することも必要と考える。

杉本 憲治 (JIA愛知)

梓設計



国土交通省HP全国管轄主管課長会議の官公庁施設の設計業務に関する実態調査2021の結果

■既設設計費実費で実施している設計者選定方式の割合
○今後も引き続き実施すべき実績（過去設計を含むものとし、以下同様）において採用している設計者選定方式は、各設計ベースで割合上位のプロポーザル方式。

設計ベース	既設設計費実費	既設設計費実費+新規設計費実費
設計者選定方針の割合	新規設計費実費割合 11件	既設設計費実費割合 11件
新規設計費実費割合	既設設計費実費割合 11件	新規設計費実費割合 11件
新規設計費実費+既設設計費実費割合	既設設計費実費割合 11件	新規設計費実費割合 11件

<https://www.mlit.go.jp/common/001216381.pdf>

トム・コンペ・プロポーザルと登録建築家

Toru Ajitsaka/20221220

■プロポーザルの目的
設計入札→コンペ・プロポーザルにより質の高い建築
設計料の安さで設計者を決めては建設の質に反映されない
設計者選定は公正性、透明性、客観性が求められる
プロポーザル→設計案でなく設計者を選ぶ

■現在の設計者選定の問題
プロポーザルに対する労力の負担→A3版3~4枚が多い→国土交通省のプロポーザル A4版2枚程度
公正性や地域属性の観点から、地域の設計者・若手設計者の活躍と育成には良質な仕事のチャンスが不可欠
→事務所規模や実績の評価の割合を下げ、技術提案書の内容の評価の割合を上げる
鹿児島の設計事務所で一般建築士5人以下の規模は少ない

↓

■プロポーザルの審査
登録建築家等の資格により応募可能とする。または、事務所規模や同種・類似のポーダーを下げる
事務所規模や実績の評価の割合を下げ、技術提案書の内容の評価の割合を上げる
少なくとも二次審査の評点に一次審査の評点を加味しない
A4版2枚程度等、提出物の内容を減らす。実務経験者等、提案書の技術的な判断が可能な審査員を加える。

トム・コンペ・プロポーザルと登録建築家

Toru Ajitsaka/20221220

■鹿児島市のプロポーザルの状況
2000年1月～2021年12月までの「鹿児島建設新聞」のデータベース
プロポーザル方式 125件
入札方式 2606件
鹿児島市の発注がほとんど入りで行われており、県内では鹿児島大学が最もプロポーザルの発注が多く、鹿児島県発注も近年数件がプロポーザルで実施。市町村も核となる庁舎等にプロポーザルで発注されている。

図1：2000年～2021年の鹿児島県における市町村等の設計者選定の実績件数

トム・コンペ・プロポーザルと登録建築家

Toru Ajitsaka/20221220

■プロポーザルと登録建築家
これまで登録建築家等の制度を条件に加えることにより、多数の応募があり、主催する自治体にもメリットがあったと考えられる。
よりオープンなプロポーザルを目指したとき、登録建築家等の制度を一つの条件とすると、資格としてより確立していくことが求められるかもしれません。
私見だが、資格取得の一つの条件として、受賞等々の経験を加味していくことも考えられるかもしれない。設計者を大学教員採用する際の条件として、JIA優秀建築賞や日本建築学会作品選奨への受賞等や全国誌（新建築等々）への掲載がカウント（評価）されることもある。
もしそのようないくつかの条件が必要なら、手間が増えるのであきらめできないが、JIA内部的にも表彰制度、資格制度等々の連携や地域での評価（地域の建築賞や雑誌等の掲載）を今後検討していくことも考えられるかもしれません。

トム・コンペ・プロポーザルと登録建築家

Toru Ajitsaka/20221220

カトリック清水教会聖堂の保存・活用への展望



■ 次の場所ではどんな景色が待っているだろうか。



■ この空間をどう活かすか。海外には教会を書店にしたコンバージョンなどもある。

本誌2022年9月号において、JIA東海支部と静岡地域会の連名による「カトリック清水教会の保存活用に関する要望書」の提出と、その建築的価値について報告した。再び紙面をいたいたないので、これまでの経緯と現状を報告する。

カトリック清水教会聖堂（以下、聖堂）の建て替えは、内部ではかなり以前から検討されてきたようだが、事態が公になったのは2020年8月である。聖堂の所有者であるカトリック横浜司教区（以下、司教区）から発信された、現聖堂の保存を断念し建て替えるという通知が、外部の者にも見える掲示板に張り出されたのである。

この判断は、司教区が発注した神奈川県内の設計事務所による耐震診断・補強案によったとされ、その補強案では現在の佇まいを維持できなくなり、保存する意味がないので建て替えるとのことであった。その補強案とは、鉄骨の直交フレームを内部に組むものであり、木造に左官仕上げで繊細に作り込まれた、リブ・ヴォールトの内部空間を顧みないものであった。木造建築物の耐震補強に関しては、特に近年、多くの知見と事例が蓄積されているにも関わらず、この案がつ

くられた背景は不明だが、この案に基づいて所有者が判断したとすれば、専門家の提案が建築物の存続を左右したことになる。専門家が歴史的建築物に敬意を払い、その価値を見極め、適切な提案を行うことがいかに重要か、残念なかたちでの教訓となった。

司教区からの通知を受け、2020年11月には日本建築学会東海支部と静岡県建築士会静岡県ヘリテージセンターから、それぞれ司教宛に「保存活用に関する要望書」が提出された。

上記に先立つ2019年1月から、聖堂の存続が話題になる中、市民の有志による保存のための署名活動が行われた。聖堂がある静岡市清水区岡地区の自治会も全面的に協力し、実に約7,800名におよぶ署名が集まった。多くが信徒ではない一般市民によるものであり、いかにこの聖堂が、地域の遺産、ランドマークとして認知されているかを証明するものとなった。

これらの動きを受け、静岡市も文化財的価値を認め、2021年4月以降は静岡市を窓口として司教区との交渉が進められることとなり、市長と司教の会談も数回にわたって行われた。現在地での保存活

用を前提として、新築の建物との併存案等も検討されたが、11月には聖堂が閉鎖され、2022年7月には、現在地では保存せず、移築する場合のみそれに応じるとの最終決定が司教区から届いた。どんな文化財も最初は未指定・未登録であり、その価値を証明し公共財として位置付けるのが文化財行政だが、その仕事がいかに困難であるかを今回の経緯は示している。

2023年1月時点では、移築による保存・活用に向けて「カトリック清水教会聖堂保存活用検討委員会」が組織され、法人化を視野に、移築先、資金調達、活用の方途等について検討が行われている。少子高齢化が進む中で、宗教施設といえどもその存続は自明ではない。他方、教会や寺院は信仰の共同体に基づいてつくられ、他の建物に比べて上質かつ独特な材料、技術、空間を有している場合が多い。現聖堂は場所を移され、教会ではなくなるが、建築の持つ力を最大限活かしたかたちでの再生が望まれる。

土屋 和男

常葉大学造形学部造形学科 教授





一寸格子ワークショップ：猪高小学校 建築教室

本年度の一寸格子ワークショップは、「猪高小・建築教室」を持って終了です。ここを基本型として、2021年の愛知県図書館、2022年10月には愛知県主催の「WOODコレクション2022」への出展参加で、「即日型ワークショップ」を試みました。今季は、募集チラシを見てエントリーしてくれた大学生の参加があり、岐阜地域会、JSCA(一社)日本構造技術者協会有志メンバーの参加も得て、様々な視点・観点からのブラッシュアップを重ねて来ました。来季のさらなる革新のために、多くの建築家の皆さんとの参加を期待します！

黒野 有一郎 (JIA愛知 事業委員長) 建築クロノ

猪高小学校の建築教室は2016年度から始まり、2020年度のみコロナ禍により中止になりましたが、今年度で7回目の開催となりました。「継続は力なり」という言葉の意味を実感し始めています。昨年度からは、学校側から「建築教室をやってもらえないか？」と言っていただけるようになってきましたし、今回は授業終了後に学校側から「来年度もぜひお願いします。」と予約していただきました。JIA愛知の建築教室は猪高小学校を「モデル校」として、毎年積み重ねてきたことによって、十分な力を備えつつあります。

今年度は、一寸格子ワークショップ～ひなん時の「くつろぎハウス」をつくろう～をテーマに11月21日(1日目事前授業)、12月12日(2日目実物大モデル作成)の2日間にわたり5年生90名を対象に開催しました。まだまだコロナ感染による影響があり、学級閉鎖の可能性もありましたが、全クラスが予定通りにワークショップを経験することができました。この経験は、子どもたちの記憶にしっかりと刻まれるでしょうし、この授業をきっかけに建築に興味を持ち始める子どもが少しずつでも増えていくことを期待しています。



黒野 直之 (JIA愛知)

笠野空間設計

授業にはJIA愛知地域会14名の他に、岐阜地域会4名、学生10名、JSCA中部木質系部会9名、PTAの方々にもご協力いただきました。木軸を使った構造体を安全かつ合理的に作るためのアドバイザーとして昨年度からJSCA木質系部会員の方々にご協力いただいています。

1日目の事前授業は「建築家とは?」「割り箸を使った構造体のレクチャー」が主な内容です。昨年までは、「輪ゴムを使った割り箸の接合」⇒「三角形製作」⇒「三角錐製作」で安定した軸モデルを経験してもらい、その後「さあ、くつろぎハウスを作りましょう！」という流れでした。各自が製作した三角錐をグループ(5,6名)のメンバーが持ち寄って接合し始め、家らしい形態を探るような作業で授業は終了します。

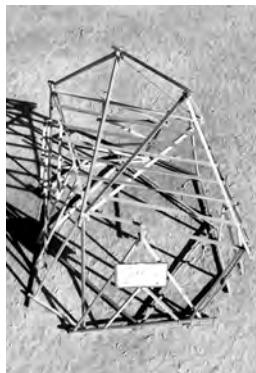
その後2,3週間で割り箸模型を完成させ、2日目ワークショップの朝に我々が目にする模型は三角錐が多用され、内部空間の小さな作品が多く見受けられました。この状況を改善する為に事前に用意しておいた「多面体」、「変形多面体」や「面を構成する部分の模型」、「余りがちな短材を上手く利用できるような工夫をした模型」を児童に見てもらいました。出来上がった模型は三角錐から逃れ、自由度が増し、内部空間も広くなっていて成果を感じることができました。模型が複雑になったことにより、建て方順序が難しくなり我々の力量も図られているように感じたほどです。全校児童の昼休みを利用した空間体験では建物内部に何人もの児童が入って遊んでいる姿が見られ、昨年までの作品の周りに児童が居るのとは一味違う光景をみることができました。

一寸格子のワークショップでは毎回同じ気持ちになりますが、この体験が何かしら子供たちの未来に作用することを期待しています。多くの方々に参加、ご協力頂きたいへんありがとうございました。



金山 美登利 (JIA愛知)

モブ構造設計



～ひなん時の「くつろぎハウス」をつくろう～



当日、生徒たちがどんな模型を造ってくれるか気掛かりである。数日前にレクチャーした割り箸模型を、一寸格子で組み上げる。受け取った模型、これなら大丈夫と胸を撫でおろすと「上下逆だよ!」と。「自立していないじゃん」とツッコミたいところだが、完成させてよと期待の目で見られるとそんなことは言えない。

第一は安全に。JSCAの方と組み立て方を即興で考える。失敗してもそれも思い出と割り切り児童たちと必死に。装飾は途中だけれど時間ギリギリなんとか、かたちに。完成したみんなの嬉しそうな顔。入賞もできた。この経験が人生の一助となってくれるといいな。家で息子に話すと、羨ましむ声

「俺もやりたかった。いいな～大人のくせに遊んで来て!!」

岐阜地域会では、数年前から愛知地域会との協同を事業計画に取り入れ活動しています。猪高小建築教室も今回で3回目の参加となりました。岐阜地域会では現在、子供たちに向けた活動は行っていません。建築教室の様な事業というのは、どうしても主催者側に多くの人手が必要となる傾向が有り、会員数が減少している我々としては人員確保にハードルが有ります。そのひとつの解決方法が協同での活動ではないかと思っています。

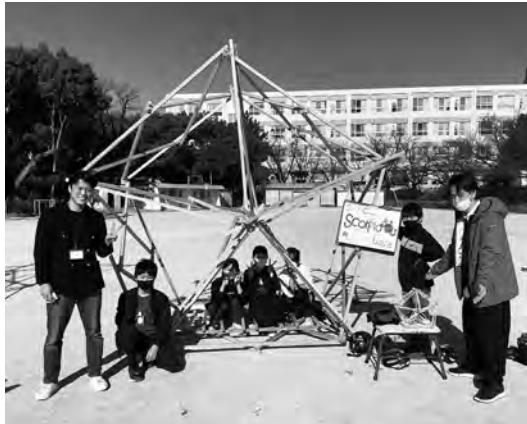
2017年から続く継続事業ですので、学校とJIAの連携も非常に完成されてきており、恒例の学校行事として子供たちにも認知されています。近年では他の学校や団体からも問い合わせが有り、継続開催の成果が表れているかと思います。そんな魅力を岐阜の子供たちにも体験してもらう機会がつくれたらと思います。



山田 浩史 (JIA岐阜)
ヒロプランニング



中川 竜夫 (JIA愛知)
アーキサイエ建築設計事務所



初めて参加させていただきました。楽しかったですね。子供達と一緒に手作りの作業、私が楽しめてもらいました。「お前、普段の授業の時は全然面白そうじゃないのに、こういう時は元気だよなー。」「勉強はつまんないけど、これは面白いじゃん。」なんて子供達の会話も繰り広げられていて、ああ、いい企画だなあ、ケンチクが教育に貢献できること、まだまだ可能性ありそうだなあと感じました。

最後、校庭に並んだ全作品を全児童が見に来てくれたとき、「ウォー、なんじゃこりゃー。」「すっげえ、やっべえぞー、これはー。」って大歓声が上がってましたよ。多くの子供達の感性を刺激できたようです。ウチの学区でもやって欲しいなあ

今回、JIAに入会させていただき、ワークショップ初参加でした。模型製作の段階では良かったのですが、実寸を作り上げると倒壊してしまい問題が発生しました。そこで、改めてもう一度、子供たちのコンセプトを聞き、案を複数提示して、そのなかからみんなで決めて作り直していました。実務同様、なかなかハラハラさせられる状況でしたが、形も面白く、頑丈そう、とのことで賞もいただきました。

大学生から建築の道に進み、図面や模型を作ることから始まりましたが、人が入れるくらい大きなものを実寸で作ることはまずありませんでした。子供たちにとっても実物を自分たちで考え、作ることはとても良い経験になったのではないかと思います。



北村 直也 (JIA岐阜)
北村直也建築設計事務所



細井 昭男 (JIA愛知)
都市造形研究所





講義 建築家の仕事(Architect's Actual Work)

今年度の「JIA大学授業」も1月20日の第15講座をもって無事終了しました。2016年から始まったこの授業に私たちは初年度から参加し、毎年、楽しく授業を担当させて頂いております。今年度は14講座を担当し「プロダクトデザイン、クラフトデザインと建築設計」といったテーマで授業を行いました。

JIA大学授業の特徴は、建築設計の第一線で活躍する建築家14組が授業を行う点にあります。教員とは違うプロフェッショナルとしての目線から授業を行うことで、学生には大きな刺激となったことでしょう。また、14組の中にはJIA会員外の方々も数名おられます。私たちも毎回、夫婦で授業を担当していますので、正会員+非会員の組み合わせとなりますが、この非会員の方々がユニークで面白い。それから、JIA大学授業には建築を学ぶ学生だけではなく、産業デザインを学ぶ学生も3割ほど参加することも特徴です。私たちは夫婦で「プロダクトデザイン」や「クラフトデザイン」の領域でも活動をしていることもあります、建築設計とプロダクトデザインやクラフトデザインを融合した内容で授業を行なっています。

私たちは、数回のワークショップをはさんで授業を進めて行きますが、今年度も2回のワークショップを行いつつ、授業を進めて行きました。

一つ目は4種類の紙を使い「書き心地」について考えてもらうワークショップなのですが、この目的は“心地”について思考を深めてもらうところにあります。些細な違いが“心



ペーパークロマトグラフィー

地”に大きな影響を与えるかもしれないことを理解して欲しいと思っています。素材や空間の違いが建築的心地にどんな影響を及ぼすのでしょうか？

二つ目のワークショップでは「ペーパークロマトグラフィー」を行ないました。これは自然の原理を応用した実験になりますが、同じ色を同じ場所に載せても、一つとして同じものは出来ません。なぜ、そうなるのかを分析してほしいからです。環境や自然が変われば、建築も変わるはずですが、現実はそう簡単にはいきません。なぜ、自然の原理では同じものができないのに、建築だけは大きく変わらないのかな？そんなところを深く考えてほしいと思っています。

これら授業を終えたのち、リアクションペーパーに授業の感想や疑問点を記入してもらうのですが、毎年、このリアクションペーパーを見ることが楽しくて仕方がない。意図を理解してくれている学生もいれば、勿論、そうでない学生もいます。ただ、相対的に理解力は高く、リアクションペーパーを通じて、私たちも学びを頂いていることに気づきました。数年前から、これは読むだけではよくないと思い、学生一人一人のリアクションペーパーに必ず意見を書くようにしています。7年間の授業を通じて、多様な建築家にふれることで、学生は新たな学びの視点を

得ることが出来たことでしょうし、私たち建築家も学生の意見に耳を傾けることで新たな視点を得ることが出来たと感じています。

まちづくりや家具、造園、プロダクトなどに興味を持つ学生が多数いたことは、本当に意義あることだと思いました。JIAには学生会員といったカテゴリーがあります。東海支部にはまだ、学生会員はそれほど多くはないように思いますが、次世代教育といった観点から考えると、このJIA大学授業や学生会員の増強は、とても重要な感じています。とかく、上から目線で学生に学びの場を提供していると感じてしまいがちですが、若者と接することで私たち建築家も大きな学びをもらっていると考えれば、彼らを温かく迎えることも出来るのではないか。

最後に、授業の活性化もあり、私たちは今年度で退きますが、この7年間、JIA大学授業は本当に楽しかったし、JIAの活動として意義あるものだと思いました。スタート時から参加させて頂いたことに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

矢田 義典(JIA愛知)

矢田義典建築設計事務所



を終えて

はじめに

7年間の講師担当、心から感謝いたします。当初発案者の久保田地域会長、二代事務局川口さん、久保田さんの提案を受け止めた会員・名市大の鈴木先生、そして学部建築3年を主とする毎年約50名(デザイン、他大学からの受講を含む)の受講生皆さん、ありがとうございました。

講義後の感想文を読むと、受講生の受けとめ方は千差万別だが、「まちの町医者」としてのまちづくり論は、まとまりがないにも関わらず、良く受け止めてくれた。7年間、毎年1回の講師として、この講義で試みたこと、宿題になったことなどを今後の講座の参考として、ここに書き留めておきたい。

私の講師歴

名市大の講師以前に、一期15回の講座を3大学(名芸大デザイン科、毎年約20人5年間、桜山女学園大学文化情報学部100名以上4年間、名古屋大学建築学科15名程度、5年間)講師を務め、短期講師2大学(中京大学商学部2年間数回、至学館大学1回)で講義を担当した。経験はさほど多くはないが、過去を参考に今回の講義を企画した。

名古屋市立大学 キャンパスは分散配置

名古屋市立大学は医学、薬学、看護、経済、人文社会、総合生命理学、データサイエンス、芸術工学の8学部と大学院を持つ総合大学である。戦前の単科大学時代を反映し、桜山、滝子、田辺通、北千種の4キャンパスに分散している。

芸術工学部のキャンパス風景

基幹バスの通る出来町線に面した萱場バス停前に芸術工学部キャンパスがある。ゲートに入った正面、キャンバスのほぼ中心に吹き抜け階段ホールの講義棟がある。この1階大教室で講義を行った。周囲に、毎年学生が制作する小空間を配

置し、広場を特徴づける。玄関左手が教務・研究室棟、広場右手にメニュー限定学食があるが、学生の姿をあまり見かけない。常々外部に開放したら経営が活性化すると思う。

テーマ「まちづくり」の講師依頼

私はJIA会員だが「都市～地域開発、地域計画」の仕事がほぼ専門のため、建築家でありながら建築設計監理の仕事が少ない。

そこを見込んで、久保田さんがあえて私に「まちづくり」を仕事のジャンルとする「私の仕事」の講師依頼で、お引き受けした。

「まちづくり」を学として語る難しさ

講義で、まちづくりの発端となる住民参加は主に60年代の公害反対運動が始まると説明した。それまでの「地域～都市整備は行政の仕事」だった。開発が公害を生むことに住民が気付いて、宅地や工場開発ひいては道路、鉄道、港湾、空港、ダム開発などが住民説明抜きにはできなくなった。ここから大規模開発への住民参加、初期まちづくりが誕生することになった。

都市だけでなく農山漁村地域で「まち起こし、村起こし」が、街道や集落では「町並み保存」が始まる。今や「古民家・空家活用が観光まちづくり」に組み込まれる時代だ。

5～60年頃とは驚くべき飛躍である。今、商店街の空き店舗再生をまちづくりと思う方もあるが、それだけでは語りきれない。いまだ「まちづくり学・学会」がない。専門家・研究者のサボタージュに他ならない。

名古屋の歴史解き明かしから語る

まちづくりは歴史保存運動ではない。むしろ地域創造を考えると、しっかりした地域の歴史認識が無ければ、文脈が通った都市創造は出来ない。そこで名古屋の歴史を整理してきた。温故知新が未来を創造すると考えているからだ。講義でそういう投げかけをさせてもらった。

まちづくりとは何か、地域～都市創造とは何かを誰にもわかりやすく、しかし学術的に語るのは苦しく、誰も未だ到達していない。

自分の仕事を語る～唄うことに気づく

悩むより原点に戻り、建築家の仕事を語ることが元々の出発点と気付き、リアルに自分のしてきたことを語ることに転換して、安心できた。

少し前に戻るが今回講義では「土地活用が周囲の多数の空き店舗を再生、南大津通をブランドストリート化したナディアパーク」のまちの進化論を加えた。住吉の町衆はご存じだが、名古屋～日本で典型的な地域活性化だが、余り語られない。

今回で講師は卒業と思っているから、最後だけのお話になってしまった。本当にありがとうございました。

今後へ期待すること

☆ 建築家の方へ

ご自身の仕事の振り返りを軸に、受講生に夢・希望・教訓を伝えてください。

☆ 受講生の皆さんへ

歴史と文化の解析から、未来に伝える地域創造のコンセプト立案に挑戦してください。

☆ 名市大建築とJIA愛知の皆様へ

講義は建築家の反省機会、様々なご意見があると思いますが、私は無償が望ましいと思います。講義をJIA会員にもっとオープンにし、会員の集団学習の場にしたい。報酬より倍付のCPDがあるとうれしいですね。



尾閑 利勝(JIA愛知)

地域計画建築研究所

過去から内部へのボリュームスタディ —小堀哲夫 講演会レポート—



2022年の12月11日、名古屋大学において建築家小堀哲夫の講演会「The Place of Availabilities 中心に大きなボイドを持つ居場所」が開催された。講演の前年に行われた東海国立大学機構(東山)プラットフォームの設計者を選ぶ公募型プロポーザルで、小堀哲夫建築設計事務所が選定され、実施設計が進む計画者の考えを聞ける良い機会となった。小堀氏は設計者としてはユニークな経歴を持ち、大学では歴史系の研究室に所属している。そんな彼の出自らしく、講演は世界各国の調査旅行の話から始まった。

講演は話の段落ごとに提示されたキーワードがあり、その言葉に沿って振り返ってみる。

最初は「広場」の話である。ヴェネチアのマルゲリータ広場の例を出し、建築と前面道路の関係の話をする。イタリアの街区らしく、「地」として広がる建物の中にぽつかりと空いた広場は、外周部で建物と接する。氏が撮影した動画から、そのアクティビティを細かく観察すると中央付近から、広場での活動、通路、建物の溢れ出し…と変わっていくが、厳密な境界ではなく、それらが混合されている様が快適さを生むと言っている。中央にはサッカーに興じる人たちがおり、そのボールが歩く人の前を横切り、ひいては建物際に溢れ出たオーニング付きカフェへ転がり、叱られたりする。そういう状態が理

想なのだと。続いては「中心」の話。エジプトのピラミッドやエスナのケヌム神殿を引き合いに出し、外観の存在感からソリッドに見えることとは裏腹に、その内部が実はボイドになっていることが、外部から内部へ進む体験をより高揚感あふれるものにしていると言う。内部に進んでも外観を見るような口ぶりだ。

次は「大地」。ここでアテネのアクロボリスの話がでてくる。神殿や各建物の配置関係について宗教的な定説を述べたあと、彼はもう少し地形の影響によって決まっているという持論を展開する。その中でも劇場の配置について時間を割いた。浅い円錐形状のスタジアムはその大きさゆえに、建設には大変な労力が必要で、地形の特徴を読み込むとこの場所でしかつくり得なかつたと解く。

次節の「地形」の段落では、デロス島の古代劇場を挙げて、神殿と劇場の宗教的位置関係を変えてまで、地形に従う先人達の設計手法をスケッチと共に話してくれた。

矢継ぎ早に世界各国を旅行しているような写真を見ていると、2つの不思議な姿勢に気づく。1つは彼が建物の内部の空間理解もボリュームの延長で考えている点だ。ふだん我々はボリュームスタディという設計手法を経たあと、建物を壁や床と言った各要素でどのように構成しているかと考えることが通例だ。空間理

解も自然とどこかでボリュームから構成要素にギアチェンジする。しかし小堀氏は建築の内部空間や小さなスケールにまでボリュームスタディを続けていくような説明の仕方だ。2つ目は、地形のあり方に従うように建築は存在するという受け身的な空間理解だ。ある敷地境界線内に完結した設計をするのではなく、一連の流れのなかでその場所の役割を考える姿勢である。それは受け身的とも言えようが、設計に歴史や風景を継承していく説得力を持たせられる。

さて、調査旅行の最後に見せてくれたのが、パナシナイコスタジアムである。最初の近代オリンピックが開かれたこの競技場は、細長いU字型平面をしており、都市に対して開かれた開放系のスタジアムだ。ここでは、地形からの建物形状の生成ではなく、逆に建物形状からもともとの土地形状を想像している。そして、スライドの終わりに東海国立大学機構(東山)プラットフォームの話に戻る。コンセプトのベースをつくるのは「谷戸」と呼ばれるかつての地形の読み取りだ。古の地形から紐解く様は、風を読むようにあるべき地形を想像する。大きな輪郭が決まるとき、もう一つの手法である内部へのボリュームスタディがはじまる。過去の地形と同じように内部をスタディした後にできた提案が、このプラットフォームだ。悠久と続く時間の流れから内部空間にまでボリュームスタディを繰り返す。変化の激しい現代社会の中で、氏の2つの姿勢が如実に表れたこの谷ができるのを心待ちにしている。

白川 在 (JIA愛知)
合同会社ZSA



サイクリングライフ

人それぞれ仕事以外で打ち込んでいるモノがあるかと思いますが、自分は「自転車」が生活の一部となっています。

中古のマウンテンバイクを購入したのが今から17年前。当初は仕事中心だった自分が子供たちと遊ぶためのツールでしたが、次第に仲間と林道や峠道を走破する「楽しさ」にはまってきました。

自転車は、

1. サイクリングによる健康増進
2. 未知の場所への冒険心
3. 自分で組み立てる楽しみ
4. 同じ趣味の仲間との語らい
5. 化石燃料を使わない移動機関

などの効能がすべて自分の思考に合致し、自分の最大の「趣味道楽」となっています。

数年前にロードバイクを購入。けもの道ルートからオノロードのサイクリングが主体となり、1日100km以上の距離を自分の足で走破できる喜びや、街並みや史跡などを



気軽にめぐることができるフットワークの軽さが続けるモチベーションとなっています。

これまで地元岡崎を起点に茶臼山や敦賀まで、また自動車に積んで琵琶湖一周やしまなみ海道、阿蘇山周遊などを廻ってきました。ここでは冒険心全開で楽しめたタイ～カンボジアツーリングをご紹介したいと思います。

2019年12月27日にタイバンコクを出発、街や集落をめぐり2020年元旦に自転車でカンボジア入り、観光都市シェムリアップやアンコールワット周辺を走り2020年1月4日出国まで合計750kmの旅でした。途中スパーク(ホイールを支える鋼線)が切れたり、GoogleMapにある道が実際にはなく

て立ち往生したり、トラブルは少々ありましたが、アユタヤはじめ地方の遺跡群、立ち寄った街の建築や街並み、自転車目線で見る人の生活の空気感など、貴重な体験を得ることができました。

コロナウイルスによる移動制限は長い月日を経てやっと緩和されてきています。今年は仕事仲間と乗鞍岳を目指せそうで楽しみにしています。



富田 昌志 (JIA愛知)
伊藤建築設計事務所

さまざまなとておき

一目見て誰の作か解る作品です。福井県越前市「陶芸の里」の公園内に設置されていました。題は「月の顔」作者は岡本太郎です。陶芸作品について鈴木蔵氏はそこから出てくるものを受け入れる。つまり例えは何がそこに内在するか深く考えることが必要。感性は見えないものが見るとちょっと西洋的感覚で東洋的な感覚ではありません。しかし、月の顔に見えます。



また今年の干支は兔です。月には兎が杵で餅をつく光景を思い浮かべますが、写真は毎年友達の陶芸家から新年の挨拶として送ってくれたお香入れです。ずいぶん多くありました。やはり今年の干支の絵柄です。彼らと同様、想像する力はみんな持つて生まれ来るでしょう。けれど、それは鍛えなければなりません。想像力をどうやって鍛えるか、難しい。とにかく想像力がないと、相手の悲しさや苦しみがわかりません。豊かな想像力で彼らは作品をつくりました。そしてメッセージは伝わりました。

友の陶芸指導で自分用の茶器を作り、茶道も続けています。10年前UIA東京大会の千人茶会は私にとって良き思い出になります。



した。人生で「もうひとりの自分」として存在しています。

“百聞は一見にしかず”ということわざがありますが、行動はそれよりもさらに価値があり、私は先輩から言葉ではなく行動から多くを学びました。知識、自己主導性、自発性、人間関係能力、行動力、前向きな姿勢といったことです。しかし、自分がしてきた設計へのフィードバックは周囲が思うほどありません。それに加え、建築には創造力も大切です。反省ばかりです。

人生第四住期になった今、自分にできることは、従業員や後輩への評価です。時間をおかないほうがメッセージを伝わりやすいといいます。

1に「気にかける」、2に「観察する」、3に「行動する」、4に「意思疎通」、5に「力になる」これをいままでに培った専門知識や経験で伝えたいと思います。



中村 久 (JIA三重)
中村建築設計事務所



主屋玄関



井戸小屋

天竜川を下り、二俣から平野へ出ですぐの左岸に大箸家住宅がある。大箸家は江戸時代末期、壱賀地村の庄屋を務め造り酒屋であった。住宅は多くが残っており、主屋の他、蔵2棟、納屋、外堀、内堀、井戸小屋の計7件が、全体として歴史的景観がよく保たれている数少ない貴重な資料として、平成20年3月に登録有形文化財に登録された。

門から正面に見えるのが主屋である。主屋は敷地内では一番古く、天保年間約180年前に建てられた。木造2階建、寄棟造桟瓦葺、正面中央に式台玄関があり、東側は土間、西側は鍵座敷とし、奥座敷に床、平書院が設けられている。2階は明治時代初めに改築されているが、大枠は江戸時代のままの状態を保っている。主屋の右側に納屋があり、手前の中庭に井戸小

屋が、門の脇に蔵2棟がある。納屋・蔵には酒造りに関わる道具などが展示されている。左側に庭園への内堀が見える。庭園にはドウダンツツジなどが植えられ、この庭を囲むように外堀がある。

現在この屋敷を整備し、「花咲乃庄」と名付け一般に公開し、主屋では手打ちそばを楽しめる場が設けられている。2階では多目的ギャラリーとして様々なイベントが開催されている。

【概要】

名称：大箸家住宅主屋
所在地：静岡県磐田市壱賀地429
年代：江戸末期／明治前期改修
登録番号：22-0125
登録年月日：平成20年3月



山田 正博 (JIA 愛知)
建築計画工房

編集後記

●コロナ禍も3年経過し、まだ終息はしないものの、ようやく日常に戻そうという動きになってきました。

編集会議もずっとオンラインでしたので、遠方の委員とはモニター上では何度も会っていましたが、先日初めて直接お会いできました。やはり対面はいいですね。さて、今月号に名古屋市立大学授業「建築家の仕事」の報告が掲載されています。私も講師として1コマの授業を担当しました。対面授業でしたが、みんなマスクをしていたので、受講生の表情がわからず不安でした。しかし、出されたレポートから、意外と話した内容に反応していたことがわかりました。各講義は講師の仕事の話で、JIA

の活動の紹介ではなかったですが、おそらくJIAの活動にも興味を持ってくれるのではないかと思いました。講師を務めた会員の執筆した記事が掲載されている『ARCHITECT』は図書館などにあるはずです。読んでもらえたうれしいです。

(川本 直義)

●海外旅行で目新しい景色に接すると、全体が目になったような感覚になる。日本に戻ってきて、いつもの日常的な景色に、安心はするのだけど、この景色も初めて見たかのように考えられないものだろうかと必ず思う。仕事柄、表紙の写真には、じっくり見入ってしまう。目新しい景色はもちろん脳の活性化を促すのだが、日常的な景色こそが新たな思考を促すのかもしれないと思った。

(谷川 ヒロシ)

ARCHITECT

第414号

発行日 2023.3.1 (毎月1回発行)

定価 380円 (税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会ブリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/

三重建築学生合同課題発表会2022

去る12月10日の土曜日「三重建築学生合同課題発表会2022」を開催しました。昨年に引き続き2回目となる今回は、前回のアンケート結果、反省会(懇親会)で出た意見等を取り入れ、会場構成や内容に変更を加えて行いました。会場は前回と同じレーモンドホール(三重大学キャンパス内)ですが、席の並べ方、課題作品の見せ方、発表の手法などを工夫し、会場にいる全員が講評者とできる限り同じ情報を共有できるよう努めました。そして指導された先生方から各大学(三重大学、三重短大、近大高専)の課題の主旨説明をいただき、講評者と参加者がそれを理解した上で、発表会をスタートさせました。

発表者は三重大学から3名、三重短大から5名、近代高専から4名の計12名で全員が大学2年生相当の学生で、各校課題の優秀者で構成されています。講評者はゲストクリティックとして、建築家の大室佑介氏をお招きしました。氏は卒業設計日本一決定戦(せんだいデザインリーグ2005)日本一に輝いた実績をお持ちで、現在三重と東京を拠点に建築設計のお仕事をされています。

また、ご自身が設計した私立大室美術館の館長としての顔もお持ちで、既存の枠にとらわれない建築家として注目の存在です。これから卒業設計に臨む発表者達にとって氏の意見を聞く機会はこれ以上望むべくもないものだと思い、お忙しいところ無理を言って参加いただきました。そして三重地域会から森本雅史地域会長と高瀬元秀会員に登壇願い、コーディネーターは久安典之会員に務めていただきました。

課題は三重大学が「公園に隣接するオープンキッチンハウス」、三重短大が「コミュニティセンター」、近大高専が「学生寮+地域交流施設」と、もちろん敷地・用途・規模もバラバラで、かつ各校の教育課程が異なるため、建築設計についての習熟度もかなり差があるという、発表する側も、講評する側もなかなか難しい状況であります。したがって、作品の優劣をつけるのではなく、それぞれの課題を、どう理解し、どのように解いたか。プレゼン資料の出来云々ではなく、どうイメージして、どのようにデザインしたか。云うならば、顕在化した作品についてではなく、学生の持つアイデアやポテンシャルにつ



いて表現し、論じる場になっている、また、そういう内面を見極める能力も求められる、そのような発表会となりました。これは一般的な学生コンペ等とは少し違う役割と価値のあるものになりつつあるのではないか、いやそうすべきだと、その場で繰り広げられる光景を見つめながら考えていました。

すべての発表と講評が終了した後、最後にゲストの大室氏より、総評と学生に向けてのアドバイスをいただいたのですが、そこで「粘土」という印象的なワードが発せられました。「粘土」は捏ねていると柔らかさを保っているが、捏ねることをやめると固くなってしまう。建築も同じで、常に捏ねることが大事で、怠るとアイデアやデザインが力チカチになってしまう。学生の間にひたすら捏ねて柔らかさを身に着けておかないと、実社会に出るとどうしても固くなってしまう。将来幾分でも柔らかさを残すために、今はグニャグニヤで良いんじゃないかな。この言葉には参加した学生だけでなく、その場に居合わせた全員が何かを感じたのではないかでしょうか。とても有意義な時間を過ごし、会場を後にしながら、来年以降も更に内容を充実させ、この発表会を続けて行こう、そう思う一日となりました。



出口 基樹 (JIA三重)
日新設計